

人間革命

人間革命

第一卷

池田大作

聖教新聞社

人 間 革 命

第 一 卷



昭和40年10月12日 発行
昭和47年2月16日 第37刷

定価 420 円

著 者 © 池 田 大 作

発行者 福 島 源 次 郎

発行所 郵便番号 160
東京都新宿区信濃町18 聖教新聞社
電話 東京 (353) 6111

落丁・乱丁本はお
取替えいたします

印刷 明和印刷株式会社
製本 牧製本印刷株式会社

1972 Printed in Japan

はじめに

私が、戸田城聖先生の伝記小説を、いつの日か、書くにいたるであろうと、人知れず心に決めてから、久しい歳月さいげつが過ぎた。

昭和二十六年春「聖教新聞」発刊の直前、ある日、先生は、ポケットを押えながら言った。「小説を書いたよ。いよいよ新聞を出すからには、小説だって載のせなければならぬだろう」先生は、いそいそとうれしそうであつた。

第一号の原稿は、先生のポケットのなかに収おさまっていた。

これが、小説、妙悟みょうご空著『人間革命』誕生であつた。

この時、私は、即座に思った。

——私もまた、いつの日か、続『人間革命』ともいふべきものを書かねばならない——と。そしてまた、昭和三十二年夏、軽井沢での一夜、思えば、御逝去ごせいきよの八か月前であつた。

先生は静養中であり、すでにお体は非常に弱っていた。私は、さまざまな御指示をいただいた

すえに、談たまたま上梓されたばかりの単行本『人間革命』に移った。

「大作、おれの『人間革命』どうだい？」

先生は、出来ばえを気にしているらしかった。

私は恐縮したが、率直に申し上げた。

「読ませていただきました。前半は極力、小説そのものとしてお書きになられたと思います。後半は、先生の貴重な体験を基とした、記録として、私は、特に感銘いたしました」

「そうか。自分のことを、一から十までうまく書くわけにはいかないなあ」

先生は呵々大笑された。

私は、その声の響きの中に、先生の御生涯を通して、先生の御精神をあやまたず後世に伝えるのは、私の使命であり、先生の期待であることを知った。

そして、時を待っていたのである。

先生のおっしゃる通りである。自分のことを、一から十までうまく書くわけにはいかない……。

ゲーテは、その自伝にさえ『詩と真実』『Dichtung und Wahrheit』と題した。このドイツの原語を、日常の平明なことに訳すならば『ウソとマコト』ということにもなる。それが彼の

自伝である。

ゲーテは、なかなかの正直者といわなければならない。人間の網膜に映った単なる事実が、ことごとく真実を語っているとは限らない。いや、真実をゆがめ、真実を嘘にすることもあろう。ここが、大事なことだと思う。ゲーテをはじめ、すぐれた作家達が、心を千々にくだいたのは――。そして一見、仮構と思われるその先に、はじめて真実の映像を刻み上げる。

私もまた、心をくだかねばならぬ。先生の真実の姿を永遠に伝えるために。

先生に縁する登場人物は、おそらく数百名になんたとするだろう。これらの登場人物のうち、牧口常三郎先生と戸田城聖先生だけが実名で、あとはことごとく仮名であることを御承知願いたい。実在の一人の人物が、時には二人の仮名を必要とすることもある。あるいは実在の二人の人物が、一人の人格として仮名で登場することもある。また、三人が一人にしぼられ、いや無数の人々が、たった一人の人物を名乗って現われてくるかもしれない。

ともあれ、一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にするのだ。――これが、この物語の主題である。

最後に、この小説が数年間にわたってつづけられ、恐らく十数巻になることを読者に御了承願ひ、御支援を乞う次第である。

目 次

齒	胎	千	一
		里	人
		の	立
車	動	道	つ

305	270	208	156
-----	-----	-----	-----

人間革命

第一卷

挿 装

画 画

三 川

芳 端

悌 龍

吉 子

黎^{れい}

明^{めい}

戦争ほど、残酷^{ざんこく}なものはない。

戦争ほど、悲惨^{ひきん}なものはない。

だが、その戦争は、まだつづいていた。

愚^{おろ}かな、指導^{しどう}者^{しや}達^{たち}に、ひきいられた国民は、まことにあわれである。

国民は、八年におよぶ戦火に、親を失い、子を失っても、その苦しみ^たに堪^たえてきた。

しかし、昭和二十年七月頃^{ころ}になると、いつ米軍が、本土に上陸するかも知れないという、重苦しい空気が、人々の心をしめつけていたのである。

七月三日、午後七時——

豊多摩^{とよたま}刑務^{けいむ}所^{しよ}（中野刑務所）の、いかめしい鉄の門の外側には、さつきから、数人の人影が立

ちつくして、人影の絶えた構内を、じっと見つめていた。かれこれ二時間にもなる。

あたりは閑散かんさんとしている。

高いコンクリートの塀へいが、ながながとめぐらされ、昼間ひるまの熱気ねつきが、たちこめていた。一日の暑熱なつねつを、たっぷり吸すった塀へいの余熱よねつは、夕方になっても、なかなか冷めそうもない。だが、梅雨つゆあけ近い、むし暑い一日が、やっと終わって、今、ひんやりとした風が武蔵野むさしのの林から、遠くそよぎはじめていく。

その時、鉄門の右の隅すみにある、小さな鉄の扉とびらから、一人の、やせ細ほそった中年の男が、いそぎ足で出てきた。手には大きな風呂敷包ふろしきづつみをかかえている。そのいそぎ足がもつれた。

門の外に立ちつくしていた人影は、このとき、なにやら鋭すどく口走ると、さっと駈かけよった。
「おお！」

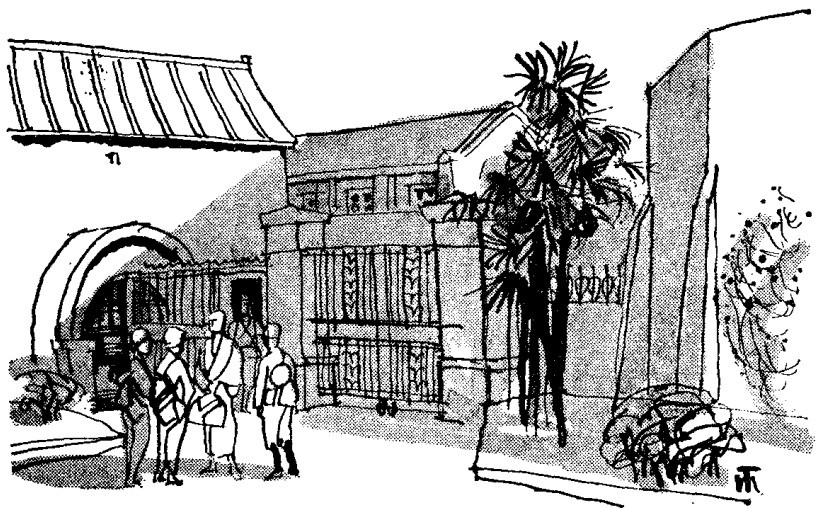
出てきた男の眼鏡めがねが、キラリと光り、思わず立ちどまって、顔をあげた。

「幾枝、迎えにきたのか。家は無むじ事か」

「焼けません。みんな元気です」

「そうか。よかった、よかった。もう、心配するな。ほんとうに苦勞くろうかけたなあ」

男は、いたわるように、妻に向かって早口に言った。



「叔父さん、おかえりなさい」

「おお、一雄もきたか」

「おかえりなさい」

「おや、姉さんも来てくれましたか」

出迎えたのは、妻の幾枝と、実姉と、その子の一雄の三人である。

男は、浴衣の着ながしで、長身の体は飄々としていた。風が裾をはらった。瞬間、脛があらわれたが、それは肉がおち、か細い棒のように見える。笑いかけていた妻の幾枝が、はっと胸をつかれ、手をのぼして、大きな風呂敷包みをひったくるように受けとると、甥の一雄はそれに手をそえ、受けとめると、肩に担いだ。

「こりや、案外、重いや」

四人の頬には、あかるい笑いが、浮かんだ。誰も彼も、一種の興奮にかられている。言いたいことが、胸にぎっしりつまっているのに、それがもどかしく、なかなか言葉にならない。四人はだまったまま、高い塀にそって、静かに歩きだしていった。

二人の女性は、モンペ姿で、防空頭巾を肩から下げている。青年は鉄兜を背中につるし、脚にゲートルを巻いていた。いつ来るかもしれぬ、空襲にそなえての、服装であろう。この三人の先

に立って肩を張り、足をはこぶ中年の男だけが、まるで、風呂がえりのような浴衣姿で、異様に目立つ。

空襲につぐ空襲で、街は暗黒にひとしい。すさみきつた人の心と同じように――。

いつか、夜の帳がおりていた。

長い塀が切れて、右に曲がると、新井仲通りである。路上には、ほとんど、人影もない。しばらく行くと、右側の家並みはつづいていたが、左側は、ぽっかり穴のあいたように、荒廃した闇が、果てしもなくひろがっていた。いうまでもなく、戦災の焼野原である。

浴衣の男は、立ちどまって、確かめでもするように、闇をじっとみすかした。

「ほう！」

彼は、大きく息をはくと、また歩きだした。彼はこれまでに、拘置所の独房で、高い小さな窓が、火炎の反射で赤くそまる夜を、幾夜となく経験はしている。そのたびに不気味な空襲のサイレンに耳をそばだて、戦争の推移に胸をいためて、深い想いに沈んだものである。だが、まのあたり焼野原を見るのは、今夜がはじめてなのである。

すでに前年十一月、マリアナ諸島を基地として、米軍機は無差別に都市の爆撃を開始していた。以来、焼夷弾攻撃によって、五月までに、東京、大阪などの大都市のほとんどを焼き払い、

さらに六月からは、連日にわたって地方の小都市を空襲していた。この時まで、本土では約三百万戸の住宅が焼かれ、六十万を越える死傷者が続出し、一千万の罹災者が、巷にあふれていたのである。

これらの詳細な事実を、彼はもちろん知る由もなかったが、そのおおよそは直覚していた。彼は道々、妻にむかって、親戚、知友の安否を、つぎからつぎへ訊ねだした。下町は、ほとんど全滅であることも知った。かろうじて、山手の知人のうち、半数が助かっているにすぎない。

しかも、その戦争はまだ終わっていない。

「馬鹿氣たことを、いつまでやっているんだ！」

彼は吐き出すように、誰に言うともなく、はげしい口調で呟いた。その声は、闇に消えたが、彼の怒りは燃えさかっていたのである。

平和と幸福への願いは、万人共通の念願であるはずだ。戦争は断じて行なうべきではない。戦争して誰が喜ぶか。誰が幸福か。勝利者も。敗北者も――。

近代日本の歴史は、十年に一度といってよいほど、国運を賭しての戦火に突入し、そのたびごとに、多大の犠牲を払い不幸に見舞われてきた。この運命を、いかにして転換すべきであろうか。

この時、彼の胸中に去来していたものは、当時、戦争の渦中であつた人々の感慨とは、まったく隔絶していたのである。

彼には、獄中にあつても、罪の意識など、あろうはずはなかった。なんの悔恨もない。反省も必要としなかった。軍部政府は、いかにも愚劣で狂信的で、わが同胞に対してすら、暴力的で、不条理である。そのような、狂気をもたらしただものの根源が、軍部政府の精神的支柱であつた「国家神道」にほかならないことを、彼は骨身にしみて、熟知していたからである。

彼は四十五歳になつていた。入獄前は堂々二十数貫もあつた。いまは十二、三貫もない。

この出獄は、戦時下の一未決囚の平凡な保釈出所の風景と、人は思ふかも知れない。しかし、この浴衣の着ながしで出獄した、坊主頭の中年の男こそ、戸田城聖その人であつたのである。

彼の恩師、牧口会長は、この門を死によつて、帰られた。

彼はいま、生きてこの門を、出たのである。

生死の二法は一心の妙用なり、と。牧口会長も戸田城聖も、ともに、広宣流布、王仏冥合の一心には、何等かわりはなかつた。

師弟不二、生死不二なればこそ、宗教革命の血は、脈々と受けつがれていたのである。